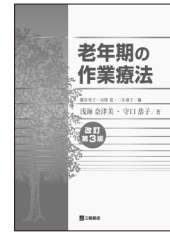


鎌倉矩子，他（編），浅海奈津美，守口恭子（著）

老年期の作業療法 改訂第3版

川 口 淳 一

（結城病院，作業療法士）



「どうせ○○だから」

老年期領域で働きながら，幾度もこの言葉を聴いた。医療従事者から，家族から，そして本人から，あきらめのように，漠然とした期待を捨てきれない「どうせ」に，私はどう立ち向かってきたのだろう。やりたいこと，やるべきことに気づく機会もなく，作業的不公正状態にある人たちに，私の作業療法は何をもたらしてきたのだろう。

本書を読んでいるとき，脳裏にこびりついてた多くの「どうせ」たちがモゾモゾと動き出した感覚があった。そして私が彼らと向き合った時間を，本書の小気味よい言葉たちが形取ってくれて，ああそうか，そういうことだったのかと納得した。久しぶりに自分に寄り添ってくれている本に出逢った感覚である。

本書が私に寄り添ってくれる理由は2つある。第1に，文章が飾らず実直な点である。本書は浅海氏・守口氏の共著であるが，単元ごとに担当せず，2人の対話の中で育まれた生きた言葉で書かれている。純粋に老年期の作業療法について語り合った2人の声が表現

されている。だからこそ読者に媚びることなく，まっすぐにそれを語りかけてくれる。

第2に，各ページに彩りを添える数々の事例の存在だ。教科書という性質上，本文は客観的表現で書かれているが，そのあとに読者の理解を促すための具体的な事例が登場する。まるで小説の挿絵のように，それはそれは多くの事例が，著者らの言わんとするところを代弁している。現場で向き合ってきた人々との出会いを学びに昇華させていく著者らの手法は，読み手を「自分だっていい対象者を知っている」という気持ちにさせる。自分もその挿絵を描きたくなる。ならば描けばいい。きっと自分だけの老年期作業療法が紡ぎ出されるはずだ。

本書では老年期作業療法の対象者の「そのひとらしい生活を形づくる作業」に焦点を当て，さらに対象者をその作業の選択や決定，遂行，継続や展開ができない，できなくなりそうな人としている。もちろん介入によって状況が改善する可能性がある場合という枠組みも忘れていない。作業療法の可能性と併せて限界も示しながら，

この対象者を一貫して追いつける。

まず「編者の序」で老年期作業療法のやりがいを再確認し，第1章「老年期作業療法の枠組み」，第2章「老年期作業療法の対象」までは一気に読み進めてよい。第5章「評価」は代表的な評価ツールが紹介されているので飛びつきたくなる章であるが，まずは本章の「まとめ」にある実習生と指導者のエピソードを一読してからだと，なぜ評価をするのか振り返ることができる。やがて自分なりの老年期作業療法の輪郭がみえてきたところで，最終章「ひとの老いと作業療法」の「老いの多様性」と題した浅海氏のパラグアイにおける経験談が，読者の視線をグイッと広げてくれる。

あのモゾモゾと動き出した「どうせ」たちは，きっと「せめて」という言葉に姿を変えて，それに続く作業を探していたのだ。その人らしい生活を形づくる，慎重しくも凛とした作業を，本書とともに探してみてはいかがだろうか。

〔 B5判 250頁 3,500円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357 〕